28年　9月30日

あきる野市議会議長殿

会派名　明るい未来を創る会
代表者名　合川　　哲夫

会派の（調査研究・研修）報告書

このことについて、下記の通り実施しましたので報告致します。

記

1、調査研究または研修実施日	平成 28 年 8月 20 日（土） 平成 28 年 8月 21 日（日）　　1泊 2日
2.調査研究または研修の場所	8月20日　福島市ホテル福島グリーンホテル ・講演と報告会
	8月21日　飯館村・南相馬市・浪江町請戸地区・いわき市
3.調査研究事項または研修名	福島第一原発事故5年後の状況視察と講演会
	・講演「福島第一原発、そのとき浪江町は」浪江町長　馬場　有氏
	・報告「避難解除地区の現状」川俣町議会議員　菅野　清一氏
	・報告「原発立地の町村は」　双葉町小川貴永氏　避難者訴訟原告団事務局長
	・報告「避難解除の村は」　川内村議会議員　志田　篤氏
	・報告「避難解除後の町は」楢葉町金井直子氏　避難者訴訟原告団事務局長
	・報告「大熊町の現状」　大熊町議会議員　木幡　ますみ氏
	・記念イベント　漫才「ふくしまの今」　脱原発お笑いコンビ「おしどり」マコ＆ケン
4.参加者氏名（　1名）	合川　哲夫
5.調査研究または研修の概要及び感想	別紙の通り。

受付
第　　号
28.9.30
あきる野市議会

第４回福島を忘れない！全国シンポジュム

日　時　　平成２８年８月２０日
会　場　　ホテル福島グリーンパレス

講演をする馬場浪江町長

講演　「福島第一原発事故　そのとき浪江町は」　講師　浪江町長　馬場　有氏

浪江町は面積２２３平方ｋｍ、人口約２３０００人、７７００世帯

この浪江町には二つの風が吹いている、それは原発事故を忘れかけてる風、もう一つは、福島産品は汚染されているという風評被害である。この二つの風に悩まされてきたのです。私たちは何も悪いことはしていません。国はその責任を果たさず反省もしてないのです。

故郷のまちは青い空と緑、海、山、川に囲まれた自然豊かな、歴史と伝統を守る精神があります。事故後の翌年には相馬野馬追を受け継ぐべく双葉町、大熊町、浪江町の人々が避難先から参加していました。また浪江に伝わる田植え踊りにも小学生が参加して伝統を守ろうとしていました。浪江の東部地域海辺の請戸地区がありますが、この地区は１３００人から１５００人の人々、６００戸の家が立ち並んでいましたが５８０棟が津波に流され１８２名の人々が犠牲になり、３１名の行方不明者を出してしまいました。現在でも月命日には、消防団と一緒に全職員総出で行方不明者の捜索を続けております。

地震、津波、原発事故の発生から５年がたち、避難指示が出されてから、この８月３１日で２０００日となります。避難された方は県外に６５００人、外国まで避難した人や、これまでに１年に４回も避難先を変えた被災世帯もあると聞いております。

原発事故避難者支援特措法により避難先で行政サービスを受けられるようにと直接首長に電話連絡で要望し、理解を戴いている。こうして避難者には優しく手を差し伸べている。事故前は小・中学校合わせて１８００人で中学校３校、小学校６校が今では５９０校に分散され、新たに小・中学校を立ち上げたが３０数名しか戻ってこない、そして５回目の成人式を二本松市にある浪江町役場の支庁で行い２１０人の参加もあり、助かりますと両親の声も、そういう状況も認識していただきたい。

しかしながら、東電側の不適切な情報発信、東電とは協定を結んではいましたが事故後は一切知らせがない。これは問題だ。メルトダウンしたことなど当然ながらありません。０１１年３月１１日午後９時２３分半径３ｋｍ以内の住民を避難、４ｋｍ離れた私の浪江町には通報がない。

津波の対策に追われ、その後の事故状況の情報を的確に掴んでいなかったことに反省している。

このように馬場町長は苦しかった胸の内を明かしながら、事実を申し述べている。

ここに報告していることはまだまだ数例です。

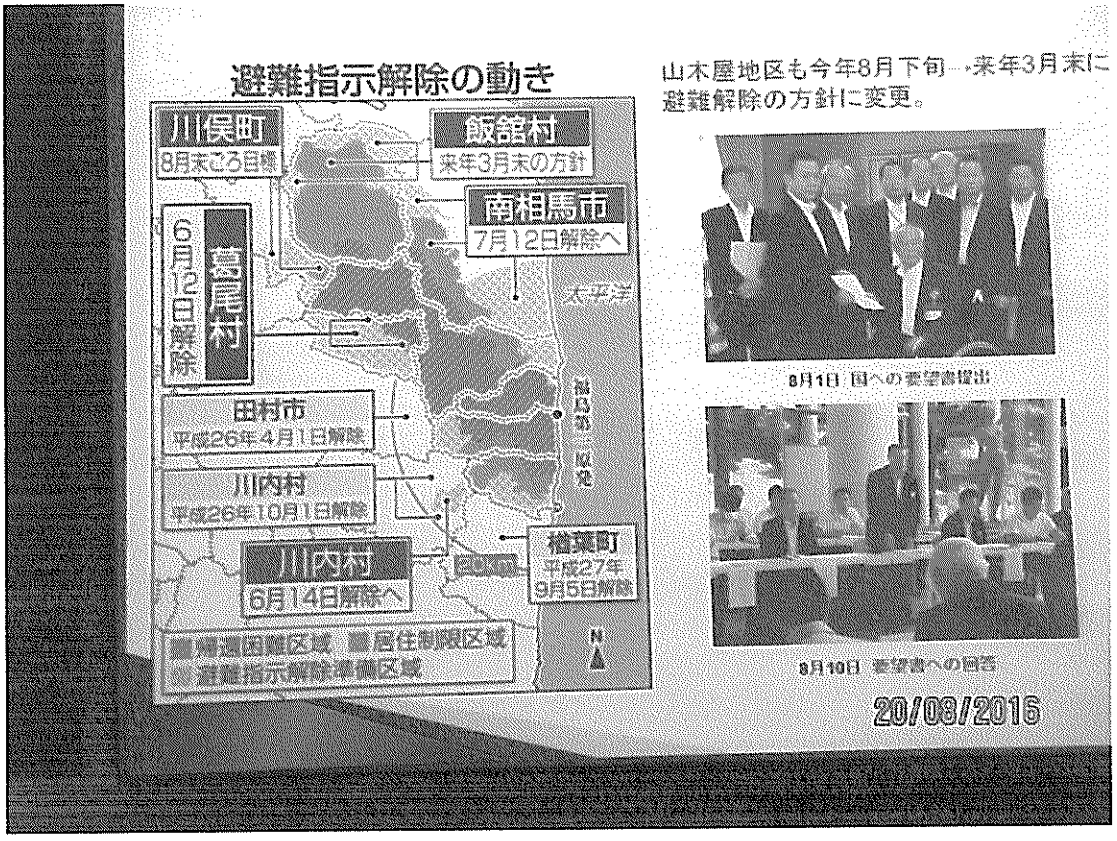
最後に馬場町長は、避難先となりうる、受け入れの可能な自治体と事前に協定を結んでおくことが大事である。そしてこの原発事故は、徹底した原因究明と検証をし公表する、このことが終わらないうちは、全国の原発の再稼働はすべきでない。いや「もう原発はいらない」と馬場町長の悲痛な叫びがあった。

報告　「避難解除地区の現状は」　　川俣町議会議員　菅野清一氏

山木屋」地区は平成２７年４月避難区域解除されたが、その前に議会として次期尚早として、環境省に解除の延期を要望をした。

除染した表土を詰め込んだプレコンパックが市内のあちこちに野積みされており、中間貯蔵所の土地収用は地主の１割程度しか承諾が取れないでいる。

などの報告があり、この先の不安はぬぐいされない。



避難指示解除の動き・時期尚早と延期を求める要望書提出

報告　「原発立地の町村は」　双葉町　小川貴永　　避難者訴訟原告団事務局長

避難する際、個人の権利が全く無視された。避難する場所、何処を通っていくのか知らされず、当初１０ｋｍくらいの場所が３０ｋｍも離れたところの避難場所となり何の支持がなく、携帯もつながらない、やっと数日後に家族と連絡が取れた状態だった。

確かにテレビでいきなり白い防護服の人が来て、いきなり避難してくださいと言ってきた、のニュースを見たことを思い出す。

報告　「避難解除の村は」　川内村議会議員　志田　篤氏

高齢者の人権擁護、生活再建が難しい、仮の生活場所は擁護老人ホーム、村の温泉施設、等で格差が出てしまう、自主避難者も２０００人でお年寄りが大多数。

解除前提の準備区域に戻る人たちはお年寄り、若い人たちは帰宅しない。このような状況であり、きちっとした帰還ができるよう明確な道筋を立てから避難指示解除を出してほしかった。

報告　「避難解除後の町は」楢葉町　金井直子氏　避難者訴訟原告団事務局長

楢葉町は福島第２原発立地地、０１６年８月現在、帰還者は８．７％身軽に移動できる人に限られる。避難先でも次第にコミュニティーが生まれ今の状況でも取り戻したい気持ちがある。

帰還コンサルの人が言っているのが８．７７マイクロシーベルト２３６５人の地権者は帰りたくないと言っている。環境省の対応が遅い。

現在では仮住まいに慣れてきた。環境も良い、いまになっては帰りたくない気持ちのほうが強い。子供の将来を考えると一層不安が募る。

報告　「大熊町の現状」大熊町議会議員　木幡ますみ氏。

この方は原発事故後遅々として進まない事故処理と汚染除去、避難解除の方向性等々に怒りを覚え、町や県、国に申すべく町議会議員に立候補した異色議員、私から見てもかなりの年齢の人(６０歳代半ば過ぎの印象)のようだがバイタリティあふれ、歯切れがよく、反骨精神そのものという感じの人で、原発事故に見まわれた人々の代弁者としてふさわしい人に見受けられた。

この後記念イベンドとして「おしどり」マコ＆ケンの漫才師が「ふくしまの今」と題して面白おかしく話していたが原発に対する憧憬が深くドイツにまで行って反原発の知識を学び、日本の現状に対して激しく反原発のテレビ、新聞報道、其のうえに自分で取材をしてネタ作りして漫才をしながら、日本国中公演に歩いて、事故になった時の恐ろしさなど訴えている。

お笑いの「よしもと」に籍を置いているが、テレビ局に政府から圧力がかかるみたいで会社もテレビ出演はご法度になっている。しかし原発反対の漫才公演は許していただいている。といった変わったタレントであるが、意外に説得力あり大衆に受け入れられている。

初日（８月２０日）はここで終了し、翌日はバスで各地を視察。

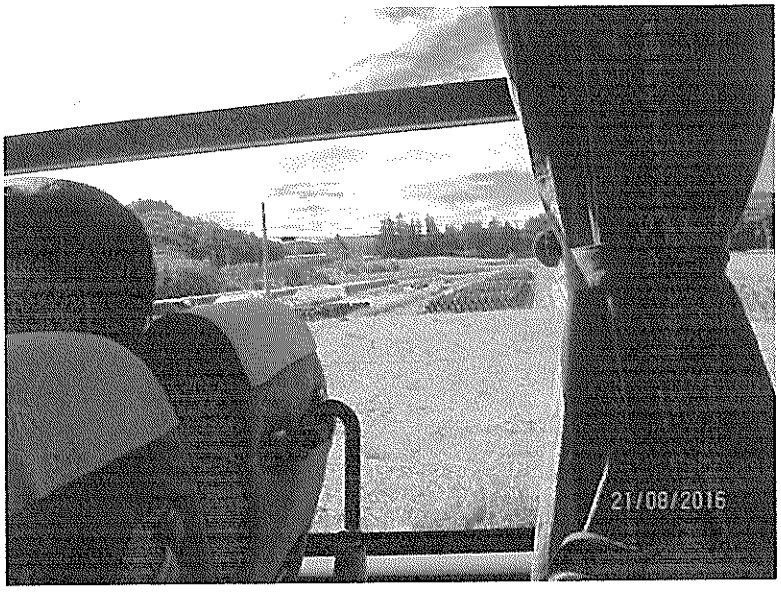
８月２１日現地視察

ホテル福島グリーンパレス午前７：３０バスにて出発・川俣町・飯館村役場で地元議員の説明を受ける約１時間・南相馬市を経て・浪江町請戸地区、津波の恐ろしさを目の当たりにし、なお原発事故による放射能汚染での避難で広大な地域が無人化している。ここでは、請戸在住だった県教育委員会に勤務している職員で自宅も津波に流され全壊している方の説明を受けた。

その後、国道６号線を南下し双葉町、大熊町に入り、事故の第一原発をはるか東に見ながら、富岡町を経て、福島第２原発のある楢葉町に、それから広野町、いわき市まで南下し再び北上し福島駅にて解散した。

福島市を出発すると間もなく写真のように除染した土壌を入れておくプレコンパック（重さ約１トン）の山がある。野積みの仮置き場でこういった場所があちこちに見受けられ、田畑は耕作されてはいないが雑草はよく刈り込んであるこれは国が行っている。

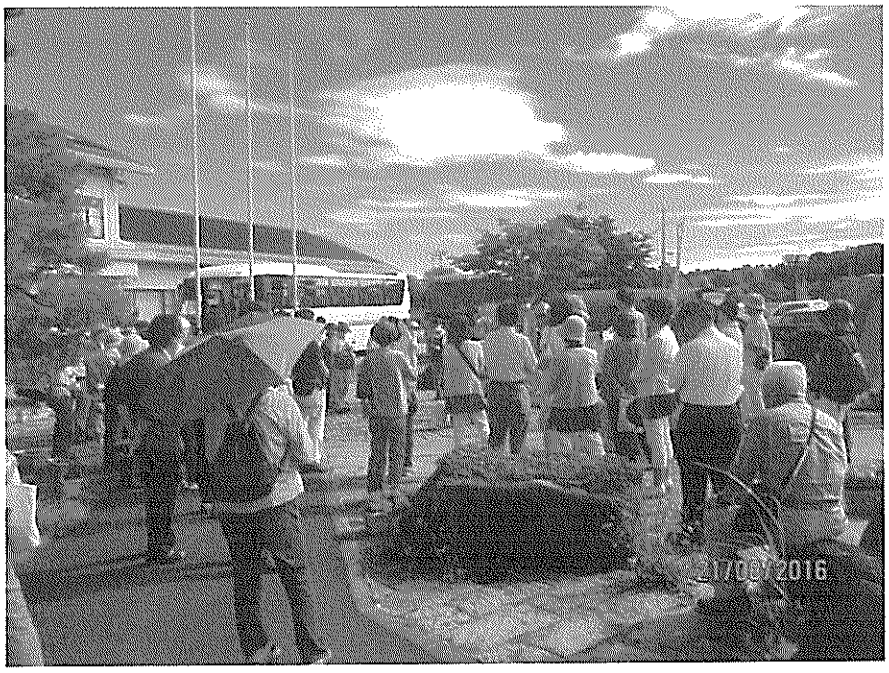
誰も住まわれなくなった大きな農家も荒れるに任せた状態で、これが原発事故の悲惨な現状を目の当たりにしたのである。



プレコンパックの置き場が見える。

飯館村役場に到着、村議会議員佐藤八郎氏の説明を受ける。

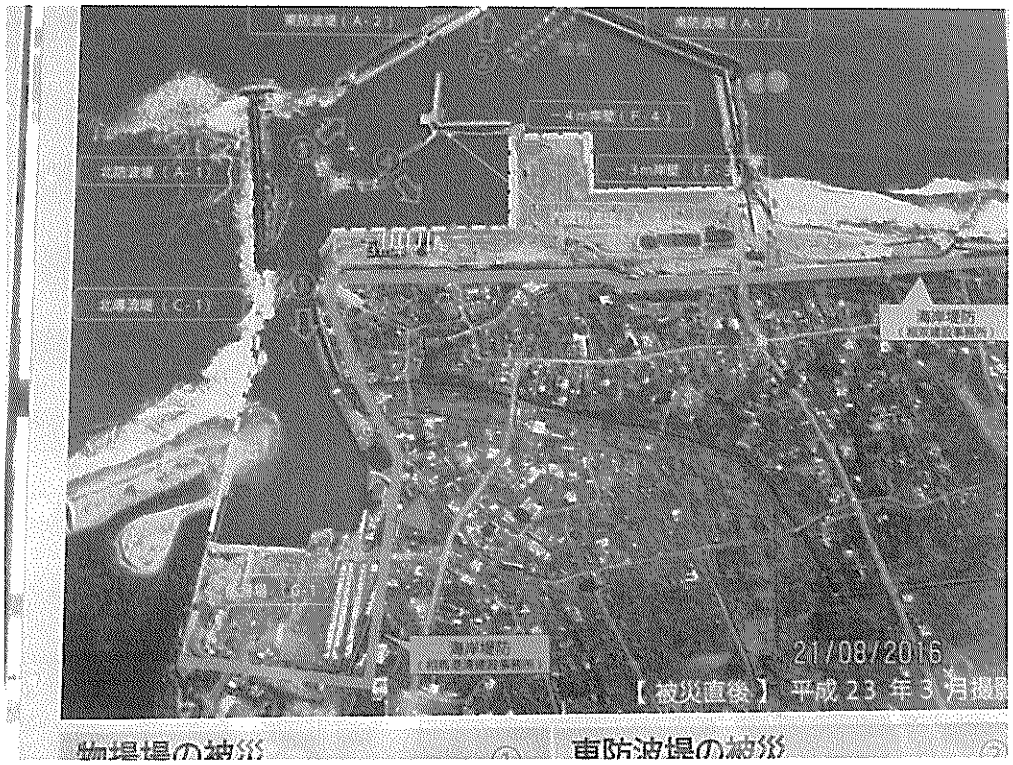
村の原発事故の対策行政は国寄りの行政があり住民側に立っていないところに問題がある。そのため佐藤村議は村長らに激しく意見を言い、具申するが聞き入れない、我慢ならず環境省など関係する国の機関に直接モノ申している。と話していた。



上の写真は村役場前広場にある、放射線量測定表示盤、３８マイクロシーベルトと表示している。

下の写真は佐藤議員の説明を聞くシンポジューム参加者

浪江町請戸地区の現状



浪江町の東部太平洋に面した請戸漁港、鮭が産卵のため遡上する請戸川、海の幸が豊富なこの地に、想像を絶する大津波が襲い前述のような被害と悲しみをもたらし、さらに、あの忌まわしい原発事故の放射能汚染にさいなまれ、復興計画は進まない。唯一あの美しい海岸沿いにスーパー堤防が計画されている。

（大津波に必死になって耐えた私ですが、人が住んでいただけるような状態ではありません。悲しいですがこのまま朽ちていくのか、復興の妨げにならないようして頂きたいものです。・・・）

請戸小学校さすがに鉄筋コンクリート造、形だけは残ったが中身はすべてのまれたが、子供たちは一人の犠牲者も出さず難を逃れた、２ｋｍ近くある小高い山に避難したのです。先生方の的確な判断と、日ごろの避難訓練の賜物と、感謝したい。

（写真は請戸小学校校舎と参加者）

請戸小学校と参加者、それと私。

感想

二日間にわたり、このシンポジュムに参加できてよかったとおもっている。

初日の講演と、報告、講演については浪江町長の現地の、行政のトップとして、常に住民側に立った中での発言と行動、ともすれば様々な補助金、助成金による影響で心が動かされることもあろうかと思われるが、常に町民に寄り添い、何時かは訪れるであろう。そして全町民が復興の暁を夢見ることができるよう、そんな復興に向かって強いリーダーシップを発揮している馬場有町長に心から、励ましの言葉と深甚なる感謝をお送りしたいと思いました。

二日目の被災地視察では、バスの中で見る光景は、ただ単にひどいとか、かわいそうとかそんな気持ちを通り越し原発に対する激しい怒りがこみあげてくるのである。中間貯蔵施設も土地所有者の１割にも満たない施設地確保状況、それは紛れもない地域住民に寄り添った政治政策がなかったことの表れではないか、国策に沿ったエネルギー政策のために、協力をしてきた地域の人々に対し優しい心を持った丁寧な対応をしていただくことを望むものです。

写真でもわかるように、汚染土壌が詰まったプレコンパックの置き場があちこちに点在している状況の中で、そして除染できない山からは、汚染された土壌が雨のたびに流れ、其の上、肝心の原子炉の放射能拡散防止で苦慮し、炉芯から燃料棒の取り出しが難航している状況下で、ただ単に放射線量が国の基準を下回っただけで国と県は避難区域解除、あるいは居住準備区域を指定し帰還を促しているが、帰還した、あるいはしようと考えている人々はたった１割程度なのです。

診療所や郵便局、銀行等々のインフラが整わない現状では無理もありません。こう言った状況にも関わらず解除を進める国や県は、原発事故の負の遺産から、あるいはその呪いから一刻も早く抜け出したい、と考えているとしか思えません。

今回のシンポジュウムに参加してわかったことは、５年も経過しているのに人々の心は癒されていないこと、そして次第に薄らいでゆくこの惨状を深く記憶にとどめていくことが大事なことと思った。